

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the origin of the words Otôsan (father) and Okâsan (mother) in standard Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 友左, WATANABE, Tomosuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001103

標準語オトウサン・オカアサンの出自

渡 辺 友 左

要旨：オトウサン・オカアサンという語はもともと江戸語にはなかった，明治に入ってから文部省が国定教科書を編纂したときに新しく作った語である，ということが巷間よく言われている。しかし，江戸語と近世上方語，それに江戸期から明治期の全国各地の方言を調べてみると，そうではないことがわかる。オトウサン・オカアサンという語は江戸語にも存在していたし，各地の方言の中にも存在していた。文部省がしたことは，当時全国各地に広く分布していたに違いないトウおよびカアを語基とする方言（たとえば，トウ・カア，トウヤー・カアヤー，トウヤン・カアヤン，オトウサ・オカアサ，トウチャン・カアチャンなどなど）の中から，オトウサン・オカアサンという語形を標準語として取り立て，国語教科書に採用したというだけのことである。
キーワード：オトウサン・オカアサン，トウ・カア，ト・カカ，標準語

On the Origin of the Words *otôsan* (father) and *okâsan* (mother) in Standard Japanese

Tomosuke Watanabe

Abstract: It has often been said that the terms *otôsan* “father” and *okâsan* “mother” in standard Japanese did not exist in the pre-modern Edo dialect and were coined in the Meiji era (late 19th-early 20th C) when the Ministry of Education compiled standardized textbooks. Our research on Edo dialect, pre-modern Kamigata dialects and dialects which existed through the Edo and Meiji periods has revealed, however, that the terms *otôsan* and *okâsan* did exist both in the Edo and other dialects. The contribution of the Ministry of Education was merely the employment of these terms as the standard forms cited in Japanese readers among many synonymous sets found in the dialects, including *tô* and *kâ*, *tôyâ* and *kâyâ*, *tôyan* and *kâyan*, *otôsa* and *okâsa*, and *tôtyan* and *kâtyan*, all of which shared *tô* and *kâ* as their respective stems.

Key words: *otôsan* “father”, *okâsan* “mother”, *tô* “father”, *kâ* “mother”, *toto* “father”, *kaka* “mother”, Standard Japanese

小論は、本文の第0節に記したとおり、昭和59年の「母の日」と「父の日」にかかわる新聞記事に触発されて書いたものではあるが、実質的には、わたしが国立国語研究所で、昭和48年度から51年度までの4年間にわたって担当した研究課題「各地方言親族語彙の言語社会学的研究」の仕事の一部をまとめたものである。この研究課題の仕事の一部をまとめた報告としては、これまで下記のもの が 公 刊 さ れ て い る。

- (a) 『各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)』（国立国語研究所報告64 秀英出版 昭和54年）
- (b) 「俗信と俚言——袍衣とアライゴ——」（『佐藤茂教授退官記念 論集 国語学』 桜楓社 昭和55年）
- (c) 「私生児を意味する方言のこと」（『研究報告集(3)』（国立国語研究所報告71 秀英出版 昭和57年）

小論は、この三つの報告につづくものである。なお小論は、末尾に付した〈追記〉を除いて、昭和60年9月17日に脱稿している。〈追記〉は、昭和61年5月28日に脱稿した。

目 次

0. はじめに	2
1. 江戸語と近世上方語の父・母を指し示す親族語	4
2. 明治期の方言集・方言辞典に見える父・母を意味する方言	6
3. 標準語オトウサン・オカアサンの出自	13
〈追 記〉	16

0. はじめに

国立国語研究所編『国語年鑑（昭和60年版）』（秀英出版発行）の「第一部 展望」の「話しことば」の項を執筆した際わたしは、その中で次のようなことを書いた。

昭和59年の、主として新聞にのった話しことばの話題の中から、私の目をひいた事柄を、1月からほぼ順を追っていくつか取りあげてみる。（中略）

話しことばとしての

おとうさん・おかあさんの出自

5月。第2日曜日は「母の日」である。その前日(12日)の東京新聞朝刊の
コラム「筆洗」は、次のように書き出していた。

国語学者の金田一春彦さんによれば、「おかあさん」という言葉ができたのは明治30年ころである。それまで士族はオカカサマ、一般ではオッカサンと呼んでいた。この中を取ったのがオカアサンで、初めて小学校の教科書に使われたときは、あまり評判がよくなかったとか▶あすは母の日。

(略)

次いで6月。第3日曜日は「父の日」である。その前日(16日)に、NHKは、テレビ番組「日本語再発見」で、この「父の日」にちなんで放送をした。5日後の21日付朝日新聞朝刊の「ビデオテープ」欄は、この番組のホスト、柴田武さんがそこで話したことを次のように紹介していた。

「お父さん」とか「お母さん」っていうのはね、明治36年に国定教科書を作る時に、父親母親を直接呼ぶ時のいい方を決めなきゃいけない。その当時東京では、とっさんとか、とっつあん、とうちゃん……全国的にもいろんないい方があった。どれをとってもうまくないという、まあ、文部省で考えたんでしょ。……そこで「お父さん」という言葉は実はつくったんです。(略)

同じようなことは、松村明さんもいっている。同氏の『江戸ことば・東京ことば』(教育出版)を見ると、「おとうさん」「おかあさん」のどちらも江戸ことばにはなかった。江戸では、「おとっつあん」「ちゃん」「おっかさん」「おっかあ」などといった。「おとうさん」は明治の末年以降、学校教育を通して用いられるようになった。「おかあさん」は、上方では幕末ごろ中流以上の家で用いられていたらしいが、東京では明治の末年以降学校教育を通して用いられるようになった(同書上巻148ページ・174ページ)。日本国語大辞典にも同じような記述がある。

ところが、前田勇さんの『江戸語大辞典』(講談社)を見ると、次のように、この二つの語がれっきとした見出し語としてのっている。近世江戸の作品を出典とする用例がついてである。

おとうさん 父の敬称。おっかさんの対。中流以上の用語。更に丁寧な時は「さん」を「さま」に替える。天保6年以後・秋色絞朝顔 中「彼方の父爺さんや太三郎さんも心細く、難儀な事で御座いませう」安政七年・三人吉三 序幕「お父さまのお迎ひなれば、なるだけ道をお急ぎなされませ」

おかあさん (元来は小児語) おかかさんの訛) 母の敬称。おとっつあんの

対。天明四年夫従以来記「かゝさんや、とんとんとうがらしをかってくんねへ、おかアサン」

こういう語が、ある時代の言語に、また、ある地方の方言にあったとか、あるということの証明は比較的簡単だ。しかし、なかったとか、ないということの証明は極めて難しいと思う。「おとうさん」「おかあさん」が江戸ことばには本当に存在しなかったのか。そして、明治になってから、新しく作られたものなのか。(略)

小論は、前田勇さんの『江戸語大辞典』と『近世上方語辞典』、それに明治期に刊行された各地の方言集・方言辞典などを資料にして、この問題にもう一步踏みこんでみようとしたものである。

1. 江戸語と近世上方語の父・母を指し示す親族語

明治期の各地方言の父・母を指し示す親族語の形式は、先行する近世期のが国の二大中央語である江戸語と上方語の父・母を指し示す親族語の形式と深いつながりをもっているものが多い、と考える。そこで江戸語と近世上方語に、父・母を指し示す親族語としてどんなものがあるかを調べてみた。資料にしたのは、前田勇さんの『江戸語大辞典』と『近世上方語辞典』である。この二つの辞典に見出し語やその他の形で収録されているのは、〈表1〉

表1 江戸語と近世上方語の父母を指し示す語

	江戸語	近世上方語
父	オトトサマ・オトトサン オトツツアン・オトツツァン トッサン オトウサン・トウサン オッチャ・チャン・チャンヤ オトモジサマ・オヤジ・オヤユビ	オトトサマ・トトサマ・トトサン オトツツアン トサン オヤジ・トモジ タア
母	オッカサマ・オッカサン・オッカチャン オッカハン・オッカア・オッカアサン オッカアチャン・カカサン・カカチャン オカカサン・オカカサマ・オカカチャン オカアサン・カアサン・オフクロ オフクロサマ	カカ・カカサン・カカハン・オカカサン オカサン・オカサマ・オカン オカア・オカアサマ・オカアサン オフクロ・カモジ

に示すとおりである。

〈江戸語〉欄のオヤジは、『江戸語大辞典』の見出し語にはなかったが、見出し語オフクロの条の記述の中には現れており、その存在が確かめられる。〈近世上方語〉欄のトモジも『近世上方語辞典』の見出し語にはなかったが、見出し語カモジの条の記述に現れるのでやはりその存在が確かめられる。オトモジサマと対をなすオカモジサマは、『江戸語大辞典』の見出し語にはないが、オトモジサマが見出し語としてある以上、その存在を推定しても間違いはあるまい。

〈表1〉について、次のコメントをそえる。

(1) オトツッタンは、オトトサンの訛であるが、江戸語にあるばかりでなく、近世上方語にも存在する。オッカサンはオカカサンの訛であり、オッカサマはオカカサマの訛である。これらは〈江戸語〉欄にはあるが、〈近世上方語〉欄にはない。トトとカカは、時代を遡って、『日葡辞書』にも見出し語として登場する。

(2) オッカアも、オカカの訛である。

(3) 江戸語にオトウサン・オカアサンが存在することは前述したとおりだが、このほかトウサン・カアサンも存在する。参考までに『江戸語大辞典』の記述を下に示す。

とうさん 小児語。「とうさま」のややぞんざいな称呼。嘉永六年以後・柳之横櫛 四下「コレ慈母^{おつか}ァちゃん、親父^{とと}さんは」

かあさん (かか^かさん^の訛) 母の敬称。とうさんの対。嘉永六年以後・柳之横櫛 五上「サア坊や、お前のお腰^{おまんこ}の守袋^かを母アさんに一寸お見せ」

(4) 『近世上方語辞典』には、父を意味するトサンはあるが、トウサン・オトウサンはない。近世上方語に父を意味するトウサン・オトウサンのないことが事実であるとすれば、それはお嬢さんを意味するトウサンとの同音衝突を避けたためであろうか。

(5) 江戸語のチャンは、オトツッチャンの上略形。チャンヤは、チャンに呼びかけの助詞ヤがついたもの。

- (6) トモジ・オトモジ, カモジ・オカモジは, 父・母を指し示す, いわゆるもじことばである。
- (7) オッチャは幼児語。オトッチャンの訛か。
- (8) 上方語の, 父を意味するタアは, 『近世上方語辞典』によると, 京都の八瀬北山へんの方言である。タア・タアサン・タなどの形で, 富山県・福井県・愛知県などの方言集に散見される。

2. 明治期の方言集・方言辞典に見える父・母を意味する方言

明治も中期以降に入ると, 各地で方言集・方言辞典の類が刊行されるようになった。それらに収録されている父・母を意味する方言を下に示す。語形の表記は原典のままとする。〈表1〉に示した江戸語や近世上方語の形式と深いつながりのあることを思わせるものが多い。トウ・カア, およびそれぞれを語基とするオトウ・オカア, トウサン・カアサン, オトウサン・オカアサン, トウヤン・カアヤン, トウチャン・カアチャン, トウサ・カアサなどの語には下線を付した。ただし鹿持雅澄著『幡多方言』の場合は, すでに原著者が傍線を使っているので, 下線を付することはしていない。

青森県

『津軽方言考』 武井水哉・青森第一中学校校友会編・発行 明治34年

見出し語として収録されているのはないが, 次の二つの文例に母親を意味する語形が出ている。

オーカサ ^{モツ} 餅ッコ ^{ケーヘ} 下され

おがさに似てる (御母様に似たり)

宮城県

明治期刊行のものは見当らなかつたが, 『仙台言葉以呂波寄』(猪苗代兼郁享保5年)には, 次の記述がある。

がム 母の事

山形県

『米沢言音考』 内田慶三編 目黒書店発行 明治35年

父 おどーつつーあま おどーつつおん おど おどーつつーあ
どど

母 かがあ かがさ だあさ だあさま だだ だーつつーあ
なお『浜萩』（荘内）（堀季雄 明和4年）には、次の記述がある。

一 江戸にてはとゞを、かゝあ、ちゝひ、ぼゝあ、あにひ、あねひなどゝ
跡を引てよぶ。庄内にてはトゝ、カゝ、ヂゝなどゝつめてよぶ。

若旦那ヲ 小旦那

父親ヲ だゝ

親類ヲ をやこ

親子の字を遠き間柄までに蒙らしむるはいかなる所以にや。

茨城県

『茨城県稲敷郡方言集』 稲敷郡教員集会編・発行 明治35年

父 とっつアー とっつアま ちゃん おっちゃん おっチャ

母 カー

『茨城県方言集覧』 茨城教育協会編・発行 明治36年

父 おど ちゃん つあー やーじき たーだー

母 かあやー やまさま

栃木県

『河内郡方言集』 明治36年

父 とっつあん とっつあー つあん つあー ちゃっっちゃ

母 おっかー くあー あっか

『下毛訛』 永野清松 永野郁文堂発行 明治43年

父 おとっつあん とっつあん ちゃん おっちゃん

母 おっかやん おっかちゃん おっかアー がっかアー あッ
かアー

『栃木県芳賀郡須藤方言訛語調』（『須藤村郷土誌』所収） 明治40年代

父 ちゃん おっちゃん

『方言訛言調査綴』 芳賀郡第四部小学校組合会編・発行 明治43年

父 チャン オッチャン

母 オッカー

千葉県

『千葉県方言調査書』 栗飯原金太郎・神戸直次編 明治34年

父 オドー トウ トッチャン トッチャー チャン チャン
ヤー

母 オッカー カーヤー カーチャン

静岡県

『方言取調書』 周智郡教育会第二支部会編・発行 明治37年

父 おとー

母 おっかー

『静岡県方言辞典』 静岡県師範学校・同女子師範学校編 吉見書店発行
明治43年

父 ちゃん おちゃん おとーさ とーやー なんな

母 おかー かーさ おかーさ おっちゃー うまい うまー
うまやい うめーやい うんめえー

長野県

『下水内郡方言調査書』 下水内郡校長会編・発行 明治35年

父 トツァ トツサン オツァー チャッチャー チャー

母 カッカ カー

『上田附近方言調査』 県立上田中学校著・発行 明治40年

父 オトツァー

母 オッカー オカサ オカサー オッカソ

『北安曇郡方言取調』 長野県北安曇郡役所 明治30年

父 トッチ

岐阜県

『東濃方言集』 恵那郡教育会編・発行 明治36年

父 とっさま とー おとー おっと ちゃー ちゃーさま

母 おっかあ かー おかー おふくろ

『岐阜県方言』 岐阜県師範学校編・発行 明治36年

父 おっと とっと

母 かかま うんまあ

新潟県

『越佐方言集』 田中勇吉著 野島書店発行 明治25年

父 とと とっつあま つあつあ とんちやん だだ だあん
さっさ まあ つやい

母 かか あや あば あつば ちやちや んめい

『佐渡方言集』 矢田求著 佐渡新聞社発行 明治42年

父 おとっつあん とっつあん とっさん ちやん とさん
とやん

母 かか いね

石川県

『石川県方言彙集』 石川県教育会編 近田書店発行 明治34年

父 おとと とと とっつあま とっつあ とーと おっちや
や おっつあ おっつあま つつあん つつあー つー
つ つーさ てえ まー まーま おごこ おでさん
チャー ちゃんじゃ ちゃーちゃ ぼっぱ

母 かー かーか かーま おか おっかあ いね やーや
やいや おかか おば おじゃん じゃー じゃあま
じゃさま でやー

また、加賀藩の竹中邦香が明治維新後に著したとされる『加賀なまり』には次のような記述がある。

トトマ・トート 父ナリ東京ニテハ〔オトッサン〕ト云フ

ジャーマ・ジャー 母 我母ニ対シテ〔ジャーマ〕ト云フ事他方へ通
セス京坂ニテハ〔オカーサン〕東京ニテハ〔オッカ
サン〕ト云フ又我妻ノ事ヲ〔ジャーマ〕ト云モノア

り最モ通セス〔家内〕ナドト云テ可ナリ又我ヨリ下
(ママ)
等ノ人ノ妻の事ヲ〔ジャー〕ト云是モ通セス〔カカ
ー〕ト云ヘシ

ヤーヤ 母ヲ此ク呼フ事他方ヘ通セス〔オッカサン〕ト云ヘシ

福井県

『若越方言集』 福田太郎編 品川書店発行 明治35年

父 とと ちゃ

母 かか かあー いね

三重県

『阿山郡方言訛語集』 阿山郡教育会編・発行 明治37年

父 とう

母 かあ

滋賀県

『方言訛語調査』 滋賀県愛知郡方言訛語調査委員会編・発行 明治36年

父 おとー

母 おかー

『明治三十一年蒐集各郡役所写本 滋賀県方言取調書』(滋賀県方言資料1)

滋賀県短期大学国語研究室編・発行 昭和25年

父 トトー オトウ チャン チャ チャー オチャー チ
ャイ チーヤン ツツアン タン テー

母 ター オワ ウメ

京都府

『京都府下方言一覧』 京都府師範学校調査 明治39年

母 カー オカン

岡山県

『方言訛語調査書 附訂正語記入』 備藤壮太郎編 私立吉備郡教育会発行
明治37年

父 オトー トトン オトン トタン

母 オカー カカン オカン

広島県

明治期のものは見当らなかったが、江戸中期以降の広島藩の儒者香川蓋臣（享保19～寛政4）が著した『秋長夜話』に、次の記述がある。

広島に。賤民乞食などの人を呼ぶに。其子の名を称して。某のトト。

某のカカといふ。中華にも嶺南の風俗かくの如し。青箱雜記に見ゆ。

この記述から、当時父・母を指す語としてトト・カカが用いられていたことがわかる。なお、父・母を指す語のこのような用法は、人類学でいうテクノミー (teknomy) の用法そのものである。

山口県

『岩国地方方諺集』 江木健太郎著 明治39年

父 トト トッサア オト一

母 カカ カカサン カカサア カカヤン オカー

香川県

『高松地方の方言』 木内桂華 『風俗画報』273・6・8所収 明治36年

父 オト一 ローソ

母 オカー オター オターサン

高知県

明治期刊行の文献は見つからなかったが、幸に江戸期の文献があった。

『幡多方言』 鹿持雅澄著 文化14年

父ヲトウト云 又トウサンモ云

母ヲタート云 ^マタタサントハイハズ

福岡県

『福岡県内方言集』 福岡県教育会本部編・発行 明治32年

父 とと ととさん ととやん ととはん ととん とさま

とさん とうやん おとうさん おとツつわん おとツさん

とツさん とんとん つつさん ちゃん ちゃんやん

ちゃんさん ちゃんちゃん ちやい

母 かかさん かかはん かかやん かさん かさま かやん
おかん おツかさん おツかしやま かーやん おかーさ
ん だだ だだはん だんだん かんかん かつかい

佐賀県

『佐賀県方言辞典』 佐賀県教育会編 河内汲古堂 明治35年

父 おとつあん とっさん おっちゃん ちゃん ちゃんちゃ
ん

母 かか かあかあ かあやん かあさん おかさん おかやん
はかさん かくさん

熊本県

『肥後方言と普通語 言葉改良の栞』 熊本県私立玉名郡教育会編・発行
明治40年

父 ととやん ととさん とつあん ちゃん

母 かかやん かかさん かつかー

大分県

『大分県方言類集』 土肥健之助著 大分甲斐書店発行 明治35年

父 トトサマ トトサ トトン トトヤン トトヤ オトッサ
マ オトツチャン オトツァン トッサマ トッサン オ
ットサン チトー オトーサマ オットン オトン トタ
ン ッタン

母 カカサマ カカヤン カカヤ カカン オカン オッカー
オッカソ オカー オカーサ オカーサマ カン カク

ナマ
(ママ)

鹿児島県

『鹿児島方言集』 鹿児島教育会編 久永金光堂 明治39年

父 ととさん おとっさん おとつあん ちゃん とさん
とおさん ちょん ちょ ちちょ ちしょ てちょ ちえ
ちょ ちえ

母 かか かかさん かさん おっかさん ねによ あほ
 はお ちゃちゃ ちゃんちゃんさん あぼ

ここで、以上に示した語の中から、トウとカア、およびトウとカアのそれぞれを語基とする語形だけを抜き出してみると、トウ系はトウを含めて8語、カア系はカアを含めて11語となった。これらの語の全国的な分布の状況を府県単位で示すと、〈表2〉のようになる。府県名の下の小さな()内に示した数字は、それを収録した方言集・方言辞典の発行年、または調査した年である。

表2 府県単位でみたトウ系とカア系の全国分布

No.	トウ系	No.	カア系
1	トウ 千葉・岐阜・三重・高知 (34) (36) (37) (文化14)	1	カア 茨城・栃木・長野・岐阜・ (35) (36) (35) (36)
2	オトウ 千葉・静岡・岐阜・滋賀・ (34) (37) (36) (31-36)		石川・福井・三重・京都 (34) (35) (37) (39)
3	オトウサ 静岡 (37) (39) (36) (35)	2	オカア 静岡・岐阜・滋賀・岡山・ (43) (36) (36) (37)
4	トウヤー 静岡 (43)		山口・香川・大分 (39) (36) (35)
5	トウヤン 福岡 (32)	3	オカアサ 静岡・大分 (43) (35)
6	トウサン 高知・鹿児島 (文化14) (39)	4	カアサ 静岡 (43)
7	オトウサン 福岡 (32)	5	カアヤー 茨城・千葉 (36) (34)
8	オトウサマ 大分 (35)	6	カアヤン 福岡・佐賀 (32) (35)
		7	カアマ 石川 (34)
		8	カアサン 佐賀 (35)
		9	オカアサン 福岡 (32)
		10	オカアサマ 大分 (35)
		11	カアチャン 千葉 (34)

3. 標準語オトウサン・オカアサンの出自

明治33年2月政府は、貴族院と衆議院から「国字国語国文ノ改良ニ関スル建議」の送付を受けた。これが直接のきっかけとなって、同年4月文部省に

国語調査委員会が設けられた。委員会がなすべき仕事の一つとして、「四、方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト」があった。明治期における各地の方言集・方言辞典の発行が、前節に示したとおり、30年代以降に集中しているのは、この中央における国語調査委員会設置への動きと無関係ではなかったのであろう。

さて第1節と第2節に報告したことから、次のことが言えるかと思う。

- (1) 〈表1〉の江戸語と近世上方語の父・母を意味する語は、トモジ・カモジ、オトモジサマなどのもじことばを除けば、ほかは明治期の方言集・方言辞典のどれかには、そのままの形で、または形を変えて収録されている。方言にかつての中央語が残存している事例は、父・母を意味する語の場合にも多いことがわかる。

なお〈表1〉にはなくて、明治期の方言集・方言辞典にある語のうち、母を意味する新潟・石川・福井のイネは、もともと姉を意味する女房詞から出たものである。母を意味する静岡のウマイ・ウンメー、岐阜のウンマアは同根であろうと思うが、出自はまだ確かめていない。アヤ・アッパその他の語の出自もまだ確かめていない。

- (2) 〈表1〉から、江戸語にもオトウサン・オカアサン、トウサン・カアサンが存在していたことがわかるが、これは3ページでも紹介したとおり、松村明さんがその著『江戸ことば・東京ことば』の中で、オトウサン・オカアサンは江戸語にはなかったと述べていることと全く食い違っている。この食い違いをのりこえるためには、『江戸語大辞典』の問題の用例とその出自の吟味が必要になる。その吟味は然るべき専門の国語学者がすることであって、国語学者ではないわたしのすることではないが、事柄の性質上、おそらく吟味をしても、誤りはでてこないだろうと思う。

ところで、わたしは次の(a)(b)二つのことによっても、オトウサン・オカアサン、トウサン・カアサンは、『江戸語大辞典』のいうとおり、江戸語にも存在していたのではないかと思う。

- (a) オトウサン・オカアサン、トウサン・カアサンは、要するにトウ・カ

アという語基に最もポピュラーな接辞であるオやサンがついただけのものである。そしてその語基トウ・カアが、〈表2〉によると、トウ・カアそのままの形で、またはオトウ・オカア、トウヤー・カアヤー、オトウサ・オカアサなどと、接辞がついた形で、千葉や茨城・栃木、さらには静岡・長野などの諸県に明治期の方言として存在しているのである。このことは近世期の中央語の一つである江戸語にも、トウ・カア、トウサン・カアサン、オトウサン・オカアサンが存在していたことをうかがわせる言語地理学的な証拠、比喩的に言えば疫学的な傍証になり得ないだろうか。

- (b) オトウサン・オカアサン・オジイサン・オバアサンの語基であるトウ・カア・ジイ・バアは、それぞれトト・カカ・ジジ・ババから規則的に導き出された幼児語である、と考えて間違いはあるまい。トト→トー、カカ→カー、ジジ→ジー、ババ→バーという図式である。母親を意味する方言ハハジャヒトがハージャヒトとなるのも、(オ)タタが(オ)ターとなるのも同じである。兄・姉を意味するニーサン・ネーサンのニー・ネーもアニ・アネのニ・ネを長音にしたものであろう。

このうち『江戸語大辞典』には、オジイサン・オバアサンが用例つきで見出し語として収録されている。試みに河竹繁俊著『歌舞伎名作集(下)』(大日本雄弁会講談社 昭和11年)に収録されている「助六所縁江戸桜」^{すけろくゆかりのえ}を読むと、登場人物のせりふの中にバアサンが使われているのを知る。舞台は江戸の吉原、三浦屋格子先のものである。バアサンも江戸語に存在していたことがわかる。とすると、それとの並びで、オトウサン・オカアサン、トウサン・カアサンも江戸語に存在していたのではあるまいか。

- (3) オトウサンは、文部省が明治36年に国定教科書を編纂するとき作ったということがよくいわれているけれども、〈表2〉を見ると、それは正しくないことがわかる。文部省がしたことは、そうではなくて、当時全国に広く分布していたに違いないトウおよびトウを語基とする方言の中から、オ

トウサンという語形を標準語として取り立て、国語教科書に採用したというだけのことである。

- (4) 『東京新聞』朝刊のコラム「筆洗」の筆者がオカアサンという語ができたのは明治30年ごろだ、士族が使っていたオカカサマと一般が使っていたオッカサンの中を取ったものだ、と書いている。このことは前に紹介したとおりだが、〈表1〉と〈表2〉を見れば、それも正しくないことがすぐにわかる。コラムの筆者は、〈金田一春彦さんによれば、〜〉と書いているけれども、金田一さんがよもやこんなことを言うはずはない。何かの間違いであろう。このような俗説が、マスコミを通して、このような形で世間に広まっていくことは、国語学のためにも決していいことではあるまいと思う。国語学にとってはさぞかしはた迷惑なことであるに違いない。

(1985・9・17)

〈追記〉

小論の主題に関連して、先学の文献を読んだ。そのうちのいくつかは本文で紹介した。なおあといくつかのものについて、この〈追記〉で紹介し、短いコメントを添えておく。文献は、発表の年順にあげる。

- (1) 中村通夫 『東京語の性格』 川田書房 昭和23年

〈オトウサン〉についての記述はないが、〈オカアサン〉については、たとえば次のように記している。

母をあらわす称呼は、今日の東京語においては「おかあさん」が最も普通に行われ、下町風の家では「おっかさん」も間々行われているが、明治初年の文献の示すところによると、サトウの会話篇には another's mother, gobodō, hahasama okkasan. One's own, haha ofkuro とあり、ヘボンの和英語林集成にも, mother, haha, okka-san ofkuro, bodō と見え、滑稽本・人情本の亜流にも「おっかさん」が用いられていて、ともに今日の東京語に最も普通に行われる「おかあさん」という称呼は見当らない。雪中梅(明治19年)・浮雲(明治20年)・緑蓑談(明治21年)・

親心（明治31年）などもすべて「おっかさん」を用いている。ただし上流ではおかあ様も行われたらしく、四迷のうき草（明治30年）等にもその例が見える。明治の末年、文部省の国語読本が「おかあさん」を採用した際も、それに対する上下の非難はかなり高かったと伝えられているから、当時の東京人にとっても「おかあさん」よりは「おっかさん」の方が熟した表現であったことが知られる。漱石の坊ちゃん（明治39年）には、東京生まれの坊ちゃんの言葉は「おっかさん」であるが、松山人の言葉としては「おかあさん」が用いられているのは、「おかあさん」のお里が関西にあることを示す好個の例であろうと思われる。（略）（54ページ）

サトーやヘボンの文献、それに明治期の文学作品についての言及はあるが、各地の方言集・方言辞典についての言及はない。もし言及があれば、『坊ちゃん』の用例を根拠に、〈おかあさん〉のお里が関西にあるとは断定できなかったのではあるまいか。

(2) 小島俊夫 『後期江戸ことばの敬語体系』 笠間書院 昭和49年

二葉亭四迷の『平凡』（明治40年）の用例を整理して、次のように記している。

「おとうさま・おかあさま・おとうさん・おかあさん」という語が、明治期の東京市民のことばとして、その地位を獲得したのは、どうやら、新興の官員・新知識人の階層であったらしく、一般の庶民階層では、江戸（の滑稽本・人情本）以来の「おとつさん」「おつかさん」がもっぱらもちいられていたようである。とりわけ、「おとうさま・おかあさま」と「おとつさん」「おつかさん」とのあいだには、

妻→夫・健三

「然し御父^{おとう}さまに悪いでせう。今になつてあの人と御交際^{おつきあひ}になつちやあ」

健三→妻

「御父^{おとう}さまつて己^{おれ}のおやちかい」

妻→健三

「無論^{あなた}貴方^{おとう}の御父^{おとう}さまですわ」(道草・14)

の対話にみられるような、深刻な違和感(「御父^{おとう}さまつて己^{おれ}のおやちかい」)がよこたわっていたようである。(略)(288~289ページ)

〈オトツツァン・オッカサン〉は江戸ことばの残照であるが、〈オトウサン・オカアサン〉はそうでない、新興の官員・新知識人の階層のことばだとする立場である。小論とは対立する立場である。

(3) 飛田良文 「現代日本語の形成」(新・日本語講座 第4巻 『日本語の歴史』 岩淵悦太郎・飛田良文編 汐文社 昭和50年)

夏目漱石の『道草』(大正4年)や『それから』(明治42年)などの文学作品の用例を根拠にして、次のように述べている。

ですから、「おとうさま」「おかあさま」「おとうさん」「おかあさん」は政府高官や官員の家族内で使用され、「おとうさま」「おかあさま」は「おとうさん」「おかあさん」よりも丁寧な呼び方であったようです。そして、明治初年の著作と考えられる『加賀なまり』には、

京阪ニテハ〔オカーサン〕東京ニテハ〔オツカサン〕ト云フ(国語学大系・方言2)

とありますから、「おかあさま」「おかあさん」は上方系のことばであり「おっかさん」は江戸系のことばであったと考えられます。

明治37年4月に国語の教科書は国定の1種類となり「おとうさん」「おかあさん」が教科書に採用されました。(略)(256ページ)

飛田さんも、『加賀なまり』を除いては、各地の方言集・方言辞典の類に言及してはいない。『加賀なまり』の記述をもとに、〈オカアサマ〉〈オカアサン〉は上方系のことばだといっているけれども、小論の立場からは、もっと広く、むしろ全国的なものだと思う。(〈オトウサマ・オトウサン〉が何系かについては言及されていない。)

- (4) 田中章夫 『東京語——その成立と展開——』 明治書院 昭和58年
『金色夜叉』(明治30年~36年)や『婦系図』(明治40年)などの用例を使
った、次の記述がある。

明治のはじめ、東京のことばでは、「父」「母」の呼び名は「オトッサ
ン(オトツツァン)」「オッカサン」が普通だった。

『金色夜叉』のお宮も、親から持ち出された、富山との縁談に、「御父
様おとつや御母様おつかさんの宜しいやうに」と返事している。

泉鏡花の『婦系図』でも、お薦・主税は、「オッカサン・オトッサン」
である。ところが上流階級の河野英吉一家の用語は、もう「カアサン・
トウサン」になっている。そして、主税が、英吉の使う「カアサン」を
気にする、つぎのような場面も描かれている。(中略)

くだって大正時代になると、「杜子春」は「お母さん」の一声を叫び、
『和解』の主人公は、「お父さん」と呼ぶ人と和解している。

「オトウサン・オカアサン」が、はじめて教科書に登場するのは、1903
年(明治36)に発行され、翌1904年(明治37)から使用された「尋常小
学読本」である。(中略)

これ以後、次第に、東京の、特に山の手の家庭に広まっていった。「オ
トウサン・オカアサン」の普及とともに、江戸語以来の「オトッサン(オ
トツツァン)・オッカサン」は、徐々に影がうすくなっていった。(略)
(47~48ページ)

各地の方言集・方言辞典に関する言及はない。記述の姿勢は、これまで
あげたものと大差はない。ちなみに、芥川龍之助の『杜子春』は大正9年、
志賀直哉の『和解』は大正6年に発表されている。

- (5) 国立国語研究所 『国定読本用語総覧(1)』 三省堂 昭和60年
「解説」(飛田良文執筆)の中で、次のような記述がある。

用語についても、「主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルルモノヲ取り」
「出来得ル丈兒童ノ日常使用スル言語ノ中ヨリ用語ヲ取りテ」と、その

性格を示している。「標準語」という語はないが、模範語という用語を用いて、さらにくわしく説明している。

模範語ハ一般児童ノ目撃シ得ル玩具、日用ノ器具、動植物ナトノ中ニテ教育的価値アルモノヲ選択セリ但シ名称ノ発音ト表記スヘキ文字トノ合一セサルモノ又ハ地方ニヨリテ名称ヲ異ニスルモノ等ハ成ルヘク之ヲ避ケタリ（第3章第1項 材料ノ選択）

これは、方言との関係を述べたものであって、国語統一への意図が示されている。往々にして、オトウサン・オカアサンが本書において造語されたと言われることがあるが、これらは当時すでに用いられていた語形の中から選択採用されたのである。(略) (4ページ)

〈オトウサン・オカアサン〉が国定教科書で造語されたものではないと明言しているのは結構なことである。

以上、いずれも国語学者である先学の文献を読んで、いささか不思議に思うことは、各地の方言集・方言辞典になぜもう少し目を向けられなかったのかということである。向けていけば、もっと変った御発言があったのではあるまいか。文学作品の用例の資料的価値はもちろん認めるけれども、それと同じように各地の方言集・方言辞典の資料的価値も認める必要があったのではないか。国語学者ではないわたしの感想である。国語学者の御感想を伺いたい。

(1986・5・28)

〈あとがき〉第3節の終りで、「金田さんがよもやこんなことを言うはずはない。～」と記した。ところが最近になって、そのよもや言うはずがないと私が思っていたことを金田一さんが言っておられることを知った。同じ『東京新聞』夕刊(昭和40年5月9日付)のコラム「ことばの歳時記」に、「～という」という文末表現ではあるが、まさにそのとおりのことを書いておられたのである。具体的なことは、この新聞か、同氏の『ことばの博物誌』(文芸春秋社 昭和41年)の90ページを読みたい。私としては、現在この小論の初校のゲラを前にして、引っ込みがつかず、困っているところである。けれども、「～という」という形でせよ、このような俗説の流布に手をかすなどというようなことは、金田一さんのような大國語学者のなさることではあるまいに、というのが私の率直な感想である。

(1987・2・18)